

【博州の防禦使を受く】

中村：烏拉熙春(2004)は、耶律弘用墓誌銘（壽昌6年・1100）中の身分を示す語句の一部**伏里弼**が、『遼史』の「{衣馬（褒の保を馬に替える）}⁸古直」に相当することより、**里**が「古」g音（又はk）を含むとしますね。

吉池：耶律弘用墓誌銘の契丹小字文と傍訳を劉鳳翥(2014)から引用すると次のようになります。伏里弼に『遼史』の「{衣馬}古直」を当てたのは劉鳳翥・青格勒(2003)⁹が早いのですが、「{衣馬}古直」によって**里**の音に言及することはありません。**里**がg（又はk）を含むことを明示したのは烏拉熙春(2004)が早いと言っているのでしょうか。

1行：**𐰺-𐰺化-伏里弼-𐰺力夫和-𐰺𐰺和-𐰺𐰺-𐰺𐰺-𐰺亦和-𐰺雨-𐰺九当**

六院{衣馬}古直郎君之族系的維里將軍之墓誌

【六院{衣馬}古直郎君族系の維里（墓主の幼名）將軍の墓誌】

中村：烏拉熙春(2004)は、**𐰺里**を bog としますが、**里** og を含む博州**𐰺里-𐰺土**の博の当時の音について、①金代北方漢語では入声韻尾は消失していた、②他の契丹小字文中の宕攝入声字に入声韻尾は認められないという二点から、当時の漢語では入声韻尾は消失していたとします。**𐰺里** bog（博）の**里** og や、先に検討した**𐰺久** bug（僕）の**久** ug などは、実際の漢語音と合わない譯音字を用いたに過ぎないという考えのようです（因此，“博”所使用の譯音字**𐰺里***bog，與上述“僕射”之“僕”所使用の譯音字**𐰺久***bug，都屬於不甚貼切的譯音之例。【128-129頁】）。「不甚貼切的譯音之例」という微妙な表現ですが、“契丹漢字音”として入声韻尾があったというようなことは想定していないように見えます。

密 mi/mir について

吉池：樞密の密は『契丹小字研究』（1985）で扱う資料の範囲では**𐰺𐰺** mi であり入声韻尾は認められないのですが、烏拉熙春(2004)は、下に引用するように、樞密の密を**𐰺月**と表記す

⁸ {}で表記の困難な一字を示す。

⁹ 劉鳳翥・青格勒(2003)「契丹小字《宋魏國妃墓誌銘》和《耶律弘用墓誌銘》考釋」『文史』2003(4)。劉鳳翥(2014)第一冊所収、257-267頁。「其第一行的**𐰺 𐰺化 伏里弼 𐰺力夫和 𐰺𐰺和 𐰺𐰺 𐰺亦和 𐰺雨 𐰺九当**爲墓誌的題目。譯作漢文爲「六院{衣馬}古直郎君之族系的維里將軍之墓之誌」。「六院{衣馬}古直郎君之族系」是遼代介紹身份時常用的語詞。內容大致相同的詞語屢見於《遼史》。例如《遼史》卷七十三《耶律斜涅赤傳》說「耶律斜涅赤，字撒刺，六院舍利{衣馬}古直之族」。《遼史》卷七十七《耶律撻烈傳》說「耶律撻烈，字涅魯衰，六院部郎君{衣馬}古直之後。「舍利」爲契丹語「郎君」的音譯。耶律弘用是聖宗皇帝之孫，不是{衣馬}古直的後裔。墓誌中之所以稱他爲「六院{衣馬}古直郎君之族系」的人，正如《用誌》第三行所說，是因爲墓誌主人的父親耶律宗愿過繼給了六院{衣馬}古直郎君之族系的兀立寧採訪[使]之族系了。」261-262頁。

【烏拉熙春(2004)の説明】

“密”の拼寫形式有兩種：𠄎𠄎／𠄎𠄎。出處如下：

① 𠄎𠄎 𠄎𠄎／樞密 [奴 14]

② 𠄎𠄎 𠄎𠄎 仲公／樞密院 [許 12]

𠄎の音値已如上所證爲 i，既然𠄎與𠄎出現場合相同，則兩者音値應當一致。但出現在契丹語詞中的𠄎，其表示的音値似乎又與之有所不同。契丹語人名“紮鄰”，契丹小字寫作令丙𠄎伏。這是耶律仁先的契丹名，見于《耶律仁先墓志銘》；該名的音譯“紮鄰”，見于《遼史》。令丙拼合之音爲 dju，伏居詞末表示尾音-n。是則𠄎在此處的音値可推定爲 ir。契丹語人名“迪里姑阿不”，契丹小字寫作令丙𠄎-生，見于《耶律智先墓志銘》；該名的音譯“迪里姑阿不”，見于漢文同墓志。按“紮鄰”之名，令丙𠄎所拼合之音當是 djur，亦即相當于“迪里”的譯音。但“迪里姑”之“姑”顯然是該詞之詞尾音節，屬于𠄎所包含的音節之中。是則𠄎在此處的音値便應推定爲 irgu。

音譯漢語的女真字也出現類似的情況。比如“刻”，寫作𠄎𠄎。“刻”屬曾攝，金代北方漢語入聲已經消失，其韻母當是開音節形式。音譯韻母的音字𠄎，拼寫女真語詞時的音値爲*ər~əl，拼寫漢語詞“刻”顯然不需要節尾輔音的形式。因此，這種場合的𠄎所代表的音値就只是一個元音ə。

契丹小字的情況可能也同于女真字，亦即某些音字的音値根據所處場合（拼寫本族語或拼寫漢語）的不同而有所變化。如上舉“室”、“漆”二字的韻母以及《許王墓志》中“密”的韻母均由音字𠄎*i 表示，這就證明臻攝開口三等字的入聲韻尾-t，在遼代漢語中沒有演變爲-r 的可能性。相反，只能表明音字𠄎在音譯漢語的場合所表示的音値不同于拼寫契丹語詞時的音値。

(133-134 頁)

中村：令丙𠄎伏 tiou[?]nə が、紮鄰と迪里姑に対応するとのことですが、紮鄰の紮は『集韻』によると糾と同音で声母は見母 k-です。『集韻』によるならば、元代音は紮鄰 kiəu-liən となり¹⁴、令丙𠄎伏 tiou[?]nə とは、語頭の音が合いません。

吉池：漢字「紮」の出自と音については、これまで様々な議論がなされてきたようです。劉鳳翥(1979)¹⁵は、遼金元三史において北方遊牧民族の軍制などに使用される紮（紮）について諸説を紹介します。音についてはこれまでに「查、迪、主、歐、糾」などとする説が出ていますが、劉氏は、史書中の「紮（紮）」は、漢字「幼」「𠄎」によって作られた契丹大字「𠄎」が、逆に漢語の中に混入したものとします。劉氏は紮（紮）の音を「幼」としますが、令丙𠄎伏 tiou[?]nə との対応から見て、「查、迪」と同様に、声母は t- とすべきなのでしょう。

¹⁴ この漢字音は藤堂明保(1978)『学研 漢和大字典』学習研究社による。

¹⁵ 劉鳳翥(1979)「關於混入漢字中的契丹大字“紮”的讀音」『民族語文』1979(4)、263-267 頁。

この点について即實(1996)は、纒(糺)に「丟」の音を当て、𠂔を *ər* とし、纒(糺) 鄰と *t 丙 iou 𠂔 ər 伏 nə* を対応させます¹⁶。このことは耶律智先墓誌銘(契丹小字文と漢文がある)で、智先の長兄である仁先の契丹語名 *今丙𠂔伏* に、漢文「迪里姑」を当てることによって支持されます。

中村:「迪里姑」の「姑」については、『遼史』の「糺鄰」に相当する部分がなく腑に落ちないのですが、とりあえず措くとしします。漢字音訳契丹語名の「里」や「鄰」の来母 *l* に対応させて、即實(1996)は *𠂔* を *ər* とし、烏拉熙春(2004)は *ir/irgu* として *r* を想定するわけですが、この点は同意できます。そうすると、*𠂔 𠂔* (樞) *𠂔 𠂔* (密) の密は *mir* あるいは *mər* であり *-r* 韻尾を想定することになるのですが、この *𠂔 𠂔* という表記の数量は例外として処理できないくらいあるのでしょうか。

吉池:ご指摘の「迪里姑」の「姑」については、管見による限り、うまい説明を見出すことができません。

問題の *𠂔 𠂔* (樞) *𠂔 𠂔* (密) と *𠂔 𠂔* (樞) *𠂔 𠂔* (密) の出現数ですが、劉浦江・康鵬(2014)¹⁷によると次のとおりです。出現箇所の提示の仕方ですが、「先 15-40」の「先」は資料名¹⁸。

「15-40」は 15 行の第 40 ブロック目。劉浦江・康鵬(2014)の情報はこれだけで、「樞密之」などの漢語は劉鳳翥(2014)第三冊所載の模写と傍訳によりました。なお、下の資料は石刻文の成立年代の順番に並べなおしたものです。

𠂔 𠂔 (樞) *𠂔 𠂔* (密): 先 15-40 樞密之、先 20-48 樞密之、先 22-72 樞密□(欠落、恐らく之)、先 23-26 樞密、先 27-2 樞密、先 35-45 樞密、先 36-67 樞密、先 37-42 樞密、先 66-31 樞密、仁 5-24 樞密、韓 4-12 樞密之、慈 6-13 樞密之、智 14-13 樞密之、奴 14-17 樞密、奴 14-21 樞密、奴 17-10 樞密、奴 18-16 樞密、弘 6-2 樞密、副 19-37 樞密、福 20-30 樞密、許 37-23 樞密、梁 10-53 樞密、澤 11-4 樞密、澤 15-4 樞密之

𠂔 𠂔 (樞) *𠂔 𠂔* (密): 迪 20-17 樞密院、奴 15-27 樞密院、許 12-8 樞密院、許 13-31 樞密副使

¹⁶ 墓誌 1 行目の契丹小字文につき次の記述がある。「這里，*今丙𠂔伏* 是墓主人之名。按已擬之音當讀 [tiouərnə]，本應音譯爲“丟額日訥”，但急讀之，則成“丟仁”。《遼史・耶律仁先傳》則記此名爲“糺鄰”。丟，記爲糺，大約一則當時字書尚未收入“丟”字；二則即使俗已使用“丟”字，但寫進人名既無吉義又不文雅。所以，選一音近字“糺”來音譯也還比較恰當。爲減少史學界的麻煩，仍從《遼史》本文題目已稱“糺鄰”。此名之首三原字 *今丙𠂔*，既用爲年号大康之康，也用爲年号天德之德。故可推知糺鄰一名之義或是有德，或是成康。」202 頁。

¹⁷ 劉浦江・康鵬(2014)『契丹小字詞彙索引』北京：中華書局。

¹⁸ 資料名の略記に、劉鳳翥(2014)にある資料名を対応させると次のとおり。

先：耶律仁先墓誌銘、仁：仁懿皇后哀冊文、韓：蕭特每・闊哥駙馬第二夫人韓氏墓誌銘、慈：耶律兀里本・慈特墓誌銘、迪：耶律迪烈墓誌銘、智：耶律智先墓誌銘、奴：耶律奴墓誌銘、弘：耶律弘用墓誌銘、副：耶律副部署墓誌銘、許：許王墓誌、梁：梁國王墓誌銘、澤：澤州刺史墓誌銘殘石。

中村：圧倒的に𠄎𠄎（樞）𠄎𠄎（密）が多いですね。これまでの議論の流れから見て意外な結果です。𠄎𠄎（樞）𠄎𠄎（密）は、「樞密」「樞密之」とあるので、樞密という単独の語の表記に用いられ、𠄎𠄎（樞）𠄎𠄎（密）の方は、「樞密院」「樞密副使」という複合語の表記に用いられていますね。

吉池：資料に2種の下線を付しましたが、奴（耶律奴墓誌銘）と許（許王墓誌）は、同じ石刻文の中に於いて、単語（樞密）の表記（𠄎𠄎 mir/mər）と複合語（樞密院、樞密副使）の表記（𠄎𠄎 mi）を使い分けています。これをどのように考えるか難問です。

烏拉熙春(2004)の言うように、𠄎は漢語のときはiであり、契丹語のときはirであるとすると、漢語において単語と複合語で表記し分けることを合理的に説明するのは困難です。また、𠄎𠄎 mir/mər と𠄎𠄎 mi は年代の違いや資料の違いによるものでもありません。

中村：唐末の漢語西北方言をチベット文字で表記した資料には、入声の-t 韻尾を-r で写すものがあります。実際の音声の詳細については種々議論がありますが、外国人の耳には-r と聞こえたのでしょうか。契丹人も漢語の非ネイティブとして他の異民族と同様にかつて-t を-r として聞き取り発音したという可能性はあります。それが「樞密」に化石的に残ったということでしょう。

吉池：当時の漢人や契丹人の一部が、入声の-t 韻尾を-r で発音しており、それが反映したとは考えにくいですね。当時密の入声は消失していたが、“契丹漢字音”として「樞密」という特定の語に入声韻尾-r が保存されており、それが“漢語と契丹語の対応表”に登録されたということでしょう。単独の「樞密」と複合語の「樞密院」「樞密副使」とで、密の音形が異なることについてどのように考えますか。

中村：単独の「樞密」に古い音形（～mir）が残り、複合語「樞密院」「樞密副使」に新しい音形（～mi、＝当時の漢語音）が表れるのは興味深いですね。類例としては、前回は挙げた日本語の「博士」があります。単独では古い音形「ハカセ」が用いられますが、複合語「医学博士」「博士論文」などでは新しい音形「ハクシ」の方が優勢です。あるいは現代漢語の白話音と文言音なども参考にできるかも知れません。「剥皮（皮をむく）」「削鉛筆（鉛筆を削る）」などの単独の動詞では「bao」「xiao」のように古くからの音形（白話音）ですが、熟語では「剝奪（boduo）」「削除（xuechu）」のように明代以降に生まれた新しい音形（文言音）で読まれます。

吉池：つまり、「樞密」は会話でもある程度用いられていたために古い音形を残し、複合語「樞密院」「樞密副使」のようにあらたまった語では新しい音形が採用されたということだ

すね。

中村：そう考えると一応の説明はつきます。ところで烏拉熙春(2004)は、樞密の密が **𠵹** mir のように -r 韻尾となるのは、漢語音の刻が女真文字で **𠵹** *kəər* または *kəəl* のように -r/-l 韻尾となる現象と同じものとしませんが、これはどういうことでしょう。

𠵹 𠵹 は漢字音か

吉池：𠵹 𠵹 は女真文字碑文の進士題名碑の碑額にでてくる語です。金光平・金啓琮(1980)の模写と傍訳を示すと次のとおりです。

碑額：𠵹 𠵹 𠵹 𠵹 𠵹 𠵹 𠵹 𠵹 𠵹 𠵹
usu in ji i gə bu mər xəxə xə ə wə xə
進 士 的 名 録 刻 石

吉池：問題の𠵹 𠵹 ですが、𠵹 *xə* と 𠵹 *ə* は、明代の女真館訳語に於いて別々の単語の中に現れ漢字の音注が付されています。𠵹 の音注は黒。黒は『中原音韻』の齊微韻で、楊耐思(1981)¹⁹によると *xei* です。𠵹 の音注は厄。厄は『中原音韻』の皆來韻で、楊耐思(1981)によると *jai* です。

中村：それはいわゆる白話音（口語音）ですね。文言音（文語音）では黒 *xə*、厄 *ə* となります²⁰。一般に、明代の各種華夷訳語の音訳漢字には北京語の白話音が用いられることは少ないので、南京官話音（黒 *xəʔ*、厄 *əʔ*~*ŋəʔ*）²¹か北京語文言音を参照する方がよいかも知れません。

吉池：日本の安馬彌一郎(1943)²²は、𠵹 𠵹 を「*he-e*」とし「刻」の漢字音としました。『中原

¹⁹ 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京：中国社会科学出版社による。以下同様。なお、*k*'は *k^h* で表記する。

²⁰ 崔世珍がハングル音注を付した16世紀初めの老乞大（いわゆる翻訳老乞大）では、各漢字の下に左側音（白話音）と右側音（文言音も多く採用）があるが、その右側音に文言音の黒 *xə* と核 *xə* が確認できる（厄 [梗攝二等麥韻影母] は見えない。核は同韻の匣母字）。

cf. 遠藤光暁(1990)『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』好文出版。

²¹ 官話音の確認には、金尼閣[Nicolas Trigault](1626)『西儒耳目資』、Joseph Edkins(1857) *A grammar of the Chinese colloquial language commonly called the Mandarin dialect*. Shanghai: Presbyterian mission press. などが参考になる。「厄」などの開口影母字の声母を前者は *g-*、後者は *ng-* で表記しており、北京語とは異なる。ただし、甲種『華夷訳語』（1382）では、影母字（および疑母字）でモンゴル語の（子音を伴わない）母音を表すから、「厄」などは公式の官話ではゼロ声母であったが、異音として広く *ŋ-* も用いられたために、西洋人たちは、その *ŋ-* の方を採用したものと考えられる。

²² 安馬彌一郎(1943)『女真文金石志稿』碧文堂。64頁参照。

音韻』によると刻は皆來韻で k^hiai、そして文言音はおそらく現代と同じ k^hə ですから、「he-e」とは子音が合いません。金光平・金啓琮(1980)²³は、滿洲語文語の geyen (名詞：刻み) に対応させました。これも語頭の子音が合いません。愛新覺羅 烏拉熙春(2002)²⁴は、女真文字 𐰺 𐰽 の音を、滿洲語文語との対応により əl~ər とします²⁵。烏拉熙春(2004)は、この əl~ər により 𐰺 𐰽 を kəər または kəəl とし、刻の漢字音とします。

中村：安馬彌一郎(1943)も烏拉熙春(2004)も 𐰺 𐰽 を刻の漢字音としますが、漢字音とする根拠は何でしょうか。

吉池：根拠についての言及は見当たりません。𐰺 𐰽 (kəər または kəəl) を漢字音とすることについて根拠が出るまでは、𐰺 𐰽 を用いた議論はペンディングということにしませんか。

中村：異論はありません。烏拉熙春(2004)は、漢字「十」の入声韻尾の有無についても論じていますね。

入声韻尾-pの有無について

吉池：烏拉熙春(2004)は、耶律永寧郎君墓誌の 21 行から 22 行にある契丹人の名に含まれる 𐰺 𐰽 に漢字の「十」を当て、𐰺 𐰽 の音は i であるから入声韻尾-p は消失しているとします。

21 行から 22 行 𐰺 𐰽-𐰺 𐰽-𐰺 𐰽-𐰺 𐰽-𐰺

十 神 奴 太師

中村：人名の 𐰺 𐰽-𐰺 𐰽-𐰺 𐰽-𐰺 は、漢語風の音節に見えますが、これを「十神奴」と読む根拠はあるのでしょうか。

吉池：根拠は示されていません。この同じ人名を、劉鳳翥(2014:776)は「世神奴」としますので、確実な根拠が提示されるまでは 𐰺 𐰽 を十の漢字音するのは控えておきましょう。

ここまでのまとめ

吉池：これまで『契丹小字研究』(1985)を中心として、即實(1996)および烏拉熙春(2004)により入声韻尾の有無について検討してきました。役職名の“崇祿大夫”の祿 𐰺 𐰽 (lug 又は luk) および役職名の“僕射”の僕 𐰺 𐰽 (bug 又は puk) に入声韻尾 (-k) が認められました。また“樞密”の密 (𐰺 𐰽 mir/ mər) に入声韻尾の痕跡 (-r) が認められました。

²³ 金光平・金啓琮(1980)『女真語言文字研究』北京：文物出版社。283 頁参照。

²⁴ 愛新覺羅 烏拉熙春(2002)『女真語言文字新研究』明善堂。

²⁵ 「“𐰺” 這個字還出現在“𐰺 𐰽”(使臣,《譯語・人物門 9》)、“𐰺 𐰽”(安, [得 30]) 等詞里, 同樣根據與之對應的滿語 əlfjin (使臣)、əlxə (安), 就可以得知“𐰺” 所代表的語音是 əl~ər 而不是 ə。」39 頁。

中村：遼代の契丹人の漢語にあつては、入声韻尾の-k と-t は元代と同様に消失していたが、崇祿大夫の祿-k、僕射の僕-k、博州の博-k、樞密の密-r などの特定の語には、古風な音を保存する“契丹漢字音”として、-k や-r が認められるということでしょう。

吉池：我々が想定した漢語と契丹小字の“対応表”（常用の役職名や地名などの対応表）にそつて言うならば、古風な音を保存する“契丹漢字音”も限定的に対応表に登録されていたということですね。なお“越國”の越 **𐰺𐰽** の入声韻尾の有無については検討を継続するということでした。それでは次回は、愛新覺羅 烏拉熙春(2006)²⁶、吳英喆(2007)、吳英喆(2011)²⁷ の順に検討しましょう。

²⁶ 愛新覺羅 烏拉熙春(2006)「契丹大字墓誌における漢語借用語の音系の基礎 —金啓琮先生逝去二周年に寄せて—」『立命館言語文化研究』18 卷 1 号、35-45 頁。

²⁷ 吳英喆(2007)「契丹文中之漢語入声韻尾的痕跡」『漢字文化』2007(3)、26-29,64 頁。吳英喆(2011)「再論契丹文中之漢語入声韻尾的痕跡」『北方文化研究』2(1)、85-90 頁。